



©Yuki Nakase

ムース川の夜明け



中瀬有紀

# のろまな猿の発見

ヤング・ジーン・リー氏作の演劇『ストレート・ホワイトメン』の初日を終え、デザインチームが劇場から去ってしばらく経ちますが、今でも心のどこかで常にこの演劇のことを考えている自分がいます。アジア・アメリカン女性戯曲家初のブロードウェイデビューとなった賢明で鋭いこの作品は、コメディの仮面をかぶった臨床的人文学ゲームと表現しても過言ではないでしょう。一度見ると戯曲の問いかけに対する答え探しで頭がいっぱいになるのは私だけではないようで、「観劇後は話すことがいっぱいになるよ」と、ニューヨーク・タイムズ紙の批評でもお墨付きです。

リー氏にスポットライトを当てた別の記事が、初日の数日前に同紙に掲載されていたことを知りました。1974年に韓国で生まれ2歳のときに両親とともに渡米した彼女の生い立ちから、ワシントン州にある小さな白人ばかりの町でアジア・アメリカンであるがゆえに差別を受け続けた思春期、アジア人生徒も多く通うカリフォルニア大学バークレー校で初めて人間として扱われた衝撃、そしてシェイクスピア研究者から戯曲家への転身まで細かく書かれているその記事は、A4用紙10枚分にも及ぶ長さです。その中で彼女は「アジア・アメリカンの脳はアジア人の両親に育てられたゆえに、脳が少し破壊しているってことに気がついたことない?それはどっちかって言うと、猿に育てられたようなもの。のろまで英語もろくに話せず、邪悪なほど無知なくせに、世間体と地位だけにこだわっている猿。」と言っています。うわ、すごい言い方、と一瞬驚きましたが、これは彼女だからこそ言える白人社会のアジア人に対する本音だと私は解釈しました。

このような例えに利用されている猿にも申し訳なさを感じますが、アジア人の自分を猿だと仮定すると、ごくまれに不快に感じた白人社会における他人の自分に対する対応に、妙に納得すると同時に気持ちも楽になります。「あ、そうか、あの人は私のことを人間

だと思っていなかったから、あのような行動に至ったのだ」という発見です。メルティング・ポットなニューヨークは、教養がある白人ほど、たとえアジア人を猿だと思ってもそれをうまく隠していますが、羊の皮をかぶった狼も舞台やテレビの制作現場で切羽詰ったときにその皮が剥がれる傾向にあります。

確かに、人間を猿だと認識すること、また英語がまもらないことだけで人格そのものを否定することは間違っていると言えるでしょう。ただ、異文化で異国人に混じって日本とまったく関係のない仕事をするなら、相手の文化と言語にできるだけ自分を合わせたほうが多少働きやすくなるかもしれません。日本での社会経験がアメリカでの仕事の邪魔をする唯一残念なことは、相談やお願いに何うときの言い回しの日米の違いです。日本人の私は丁重にお尋ねしようとして前置きが長くなり、肝心の主旨がぼやけて主題を待つ聞き手をイライラさせてしまうことがあります。プランの変更などを伝えるとき、「理由は必要ないから何がほしいのか早く言ってくれ」とアメリカ人は感じるようです。

このあいだ休日に訪れたメイン州の田舎町にあるロッジの柱に、「1943」と彫られているイニシャルを見つけました。ドイツ人の友人はそれを見て「え、アメリカ人は戦争中にバケーション休暇をとっていたのか?!」と驚いていましたが、私はふと『ストレート・ホワイトメン』に対する答えが見つかった気がしました。戦争一つを例に挙げても両極端に違う経験をした人間が共存する地球上で、一つのカテゴリーを「ノーマル」と決め付けることは、きっと無理なのかもしれません。幸せの形はいろいろで、それを一方的に「猿」だの「負け犬」だの言うのは可笑的、というのがあの演劇から学んだ私の答えです。ただ、これも唯一無二の答えではないはず。戯曲でもって人々に考えるきっかけと答えの幅広さを与えた、リー氏はやっぱり凄いです。